

さんすう
しゃかい
たいいく
ぼうけん
きゅうしよく
こくこ
としよ
かていか

草子ブックガイド 早稲田文学編 ③



玉川重機

モーニング本誌に掲載された「草子ブックガイド」でとりあげた中島敦「山月記」これには対をなすと思われる物語がありますそれが――

山月記
猛烈に
内にこもる人の
物語

名人伝
強烈に
外に向かう人の
物語

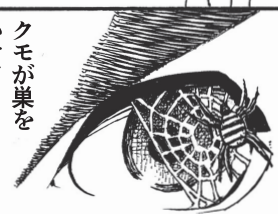
「名人伝」です

主人公・紀昌は天下第二の弓の名人になろうとします



特訓① 瞬きをやめることを 習う

妻の機織台の下に
潜り込んで
眼スレスレに足踏板が
上下するのを見続け
2年



特訓② 視ることを学ぶ

風を窓にさげて
睨み暮らす事
3年



師弟対決



この物語には
涙の小さな人が
いっぱい出て来ます

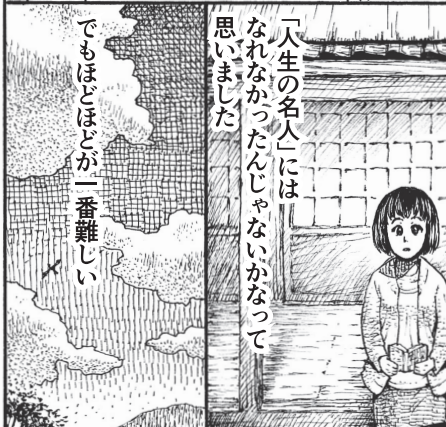


対決で引き分けた師は
「あいつやだな」と思つて
奥義を極めたかつたら
甘蝇老師に会いに行けと言ひ
羊のような
おだやかな目



老師は「射之射」でなく
「不射之射」こそ真の芸道と
素手の見えない弓と矢で
鷹を打ち落とします
エア弓矢ですね
ウソツ

9年修業して山を下りた
紀昌は顔つきが変わります
くまげずギライ 愚者のように
その顔を見て「これぞ名人！」
と皆、認めちゃいます
顔で決まっちゃて
いいのかな？
こんなになっちゃった



弓を持つとうとしない紀昌
訳を尋ねると
至為は為す無く、
至言は言を去り、
至射は射ること
なし
悟ります



弓を執らざる弓の名人は都の誇りとなつて
弓に触れないほど評判は喧伝されたという
その道具こそ紀昌が人生を
賭けたはずの弓でした
夜、雲に乗った紀昌が
古の名人二人と
腕比べをして
放った矢はオリオンと
シリウスの間に
消えたと言ふ(談)



名前の中、老紀昌は
知人の家で見憶えのある
道具を見つけます
何だ、これ

大切な弓の姿を忘れた紀昌は
何の名人になつたのでしょうか
カラッポの心の中には
何が残つてたのでしょうか



「名人伝」にしても
「山月記」にしても
人生、ほどほどが
一番つてこと
教えてくれます
おしまい

「山月記」をとりあげた「草子ブックガイド」本編は、11月18日発売の「モーニング」本誌No.51に、大増量37Pの掲載。お見逃しなく!! 草子×WBコラボページもあるよ!